

和歌山の朝と私

施 暁鋒（中国・教育学研究科修士課程）

今年の三月に和歌山市に引っ越してきた。和歌山市は思ったより小さくて後悔の気持ちさえ覚えた。半年ぐらい経った今はだんだんこの町の好きになってきた。

コンビニの早朝のアルバイトのために、朝早起ししなければならない私は和歌山の朝と親密に接触することができる。朝の光を浴びて自転車で北島橋を渡るのは毎日欠かせない仕事である。朝の道は通行人が少なくてお伴をしてくれるのは太陽とカラスだった。日本に来たばかりの時嫌な思いをさせてくれたカラスの鳴き声もいつの日か気づかれぬように音楽のように聞こえてきた。中国ではめったに目に入らないカラスを怖がっていた。別にカラスが朝しか鳴かないわけでもないが、朝に聞こえた鳴き声が特別な思いを覚えている。これが一体どんな思いだろうか、自分もうまく説明できない。朝早起きに慣れてきた私はアルバイトがない日にも早く起きて紀ノ川の河原に散歩に出かけるようになった。朝のすがすがしい空気を思いきり吸い、そして吐き出して頭の中の不満が風の中に舞い込んでいく。だんだん、姿も空の中で消えてしまう。太陽が昇るにつれて紀ノ川がピカピカ輝き始める。風のテンポを合わせて踊ったり歌ったりする。川にも感情があると私は確信する。嵐の日に優雅な踊りもめちゃくちゃになり、歌もリズムを失う。川は感情を有する人間と同じように喜んだり、怒ったりする。でも、人間は悲しんだり、がっかりしたりすることと違って川はしない。晴れる日になってまた優しくしか見えない川になれる。人間が一度傷付かれたら、いくら直れても元に戻ることが難しいだろう。そういえば、川は感情がないに見えるようにもなった。ややこしい問題になってしまう。紀ノ川はどこまで流れていくのか、またどこから流れてくるのか、私は知らない、多分紀ノ川自身も分からないだろう。自分がいったい何のために日本に来たのか、これから何をするのかさえ分からない。紀ノ川はとにかく休まずに流れている。私も紀ノ川のようにとにかく頑張って歩いていく。目的が分からなくてもじっくりと前向きに進めば、見えてくるはずだった。紀ノ川はきっと私と同じように思っている。



大阪市みたいな大都会に住んでみたいと思った。大阪の朝は絶対和歌山と違うはずだ。猛スピードで走る電車の音がこの町の繁栄を象徴している。行き来するサラリーマンが歩調を揃って違う道を歩んで、同じ目的に向かっている。私は彼らに聞かなくても、彼らの心を知っている。きっと私と一緒に。時計を気にしながら、慌ただしく歩んでいる。空を見る余裕もなく、汗をふく余裕もない。やっぱり大阪みたい大都会より私は和歌山の方が好きだ。ここで、北島橋の欄干に伏せてゆっくりと紀ノ川を楽しめる。ここで紀ノ川の河原に横たわって好きな本を読んで、誰の邪魔もなく自分の日記を書ける。和歌山はどう、繁栄だかと母に聞かれた。うん、穏やかで、また心が癒される町だよと母に教えた。

太陽が見えない日もあるにもかかわらず、太陽が毎日に登る。和歌山も毎日変わらない穏やかな朝を迎える。私も毎日に朝の紀ノ川の景色を楽しめる。ここのすべてが穏やかで、新鮮で、また好奇である。よく観察すると、紀ノ川の水位や色が天気によって変わっている。スーパーで紀ノ川の水に育てられたみかんを買ってきて美味しかった。私の眼、耳、鼻、また口は紀ノ川に恵まれて紀ノ川にありがとうと伝えたい。紀ノ川は私の言葉を分かってくれないかもしれないが、私の心、彼女が分かってくれるはずである。

和歌山、紀ノ川、ありがとう。